

東 北新幹線が2010年に新青森駅まで延長運転されるのを前に、下北半島への誘客を志す地元の取り組みを支援するプロジェクトが動き出した。

下北半島は多くの地方部と同様に、過疎化、高齢化が進み、観光客数もここ数年減少が続いている。前回、地域おこしをする際に肝要となるポイント整理を行ったが、この下北はまさに「行政主導型」（民間のまとまりよりも行政側が主体で頑張るケース）に当てはまる。プロジェクトは、青森県下北地域県民局、地域連携部の地元を愛する若手スタッフの情熱によって動き出した。

半島内には、550年の歴史を持つ下風呂温泉や恐山、仏ヶ浦などに代表される観光地もあるが、観光客が半島を周遊するための仕掛けや、具体的な地域連携による誘客の取り組みはほとんど行われていなかった。今回のプロジェクトを立ち上げるにあたり、下北半島で観光関連の活動を行っている人たちが一堂に集まる会議が開催され、それぞれのエリア内での活動が報告された。

私はその報告を聞きながら、思わず「もったいない」とため息が出てしまった。規模は小さいながらも、それぞれのエリアでは工夫を凝らした面白い活動をたくさん行っているのではないかと。私がさらに驚いたのは、その活動内容を地元の人々も互いに知らずにいたことである。

では面白い2つの取り組みについて掘り下げて紹介しよう。まず1つ目は、子どもたちへの「下北かるた」の普及の取り組みである。この郷土かるたは、下北地域に伝わる名所旧跡、地域の産業、味覚など、旅行者の五感を刺激する内容で構成されている。

若者の地域離れは、各地で観光の再生を行う際にも深刻な問題だ。若者が地元を離れる最大の理由は雇用問題だが、時代の変遷とともに郷土愛が薄くなっていることも関係している。この取り組みの素晴らしさは、地元の子供たちを対象にこの下北かるたを使ったかるた大会を幼い頃から定期的に行うこ

とにより、自分が生まれ育っている故郷の魅力をかると通じてゲーム感覚で学べる点だ。この取り組みではさらに、かるたに登場するスポットを観光ポイントとして磨き、その場所に看板を設置することで、観光客に下北半島の魅力をわかりやすくPRしていく仕組みに造りあげていく計画もある。

今、着々と地元の青年会議所のスタッフが力を合わせ作業に取り組んでいる。南北に長い下北半島を回遊する場合にネックになっていたのが、観光ポイント間の移動に時間がかかることと、その中間に観光ポイントが少ないことだ。かるたに登場する観光

ポイントを磨いていけば、この問題も大きく緩和される。今後はドライブによるスタンプラリーなどを企画し、地元でニッチな特産品をこれらのスポットで販売するなど、旅行者の回遊性を高める楽しいオリジナル仕掛けを展開していく予定である。

最後に紹介したいのは下北半島の先端、まぐろの町、大間町の取り組みである。渡哲也さん主演の映画『まぐろ』や、年末のテレビ番組でも恒例となった大間のまぐろ漁をわかりやすく観光に直結させていく、まさに産業観光の取り組みが始まっている。

サバといえば関さば、まぐろと言えば大間が世界最高のブランドになっているのだから、この大間を観光素材として磨いていく。例えば「腕きき漁師のまぐろ御殿見学ツアー」「大間漁協の浜端組合長の大間のまぐろの秘密談義」「大間特製まぐろ海鮮丼」の開発などの面白い企画が進んでいる。フェリーが大間／函館間を1時間半で結んでいるので、広域観光の観点から食をテーマに、食の函館と大間のまぐろをつなぐ究極のグルメツアーなども十分集客が期待できるだろう。バラ色の将来に備え、なんと地元の奥さんたちで構成する「おおもエスコートクラブ」も発足した。大間弁も鮮やかな元気の良いおかあちゃんがバスに乗り込み、直接大間町の案内を行う企画もスタートした。

地域活性化 伝道師が行く

文・篠原靖



郷土かるたで紹介するスポットに看板を設置

vol.
2

動き出した下北半島 活性化プロジェクト・後編

しのはら・やすし ●81年東武トラベル入社。05年から企画仕入部副部長として観光素材の発掘・旅行商品化を手掛ける。この実績から07年、内閣府地域活性化伝道師に任命。